

宮城県南三陸町の被災した文化遺産の現状と復興の課題

Current Conditions of Cultural Heritages which Suffered from the Great East Japan Earthquake;
Challenges of the Recovering Process of Damaged Cultural Environment
in the Case of Minami-Sanriku-Cho, Miyagi Prefecture, Japan

板谷直子 (牛谷直子)¹・ロヒト・ジグヤス²・中谷友樹³

Naoko Itaya, Rohit Jigyasu and Tomoki Nakaya

¹立命館大学准教授 衣笠総合研究機構 歴史都市防災研究所 (〒603-8341 京都市北区小松原北町58)

Associate Professor, Kinugasa Research Organization, Institute of Disaster Mitigation of Urban Cultural Heritage, Ritsumeikan University

²立命館大学教授 衣笠総合研究機構 歴史都市防災研究所 (〒603-8341 京都市北区小松原北町58)

Professor, Kinugasa Research Organization, Institute of Disaster Mitigation of Urban Cultural Heritage, Ritsumeikan University

³立命館大学教授 文学研究科・歴史都市防災研究所 (〒603-8341 京都市北区小松原北町58)

Professor, College of Letter and Institute of Disaster Mitigation for Urban Cultural Heritage, Ritsumeikan University

This study aims to summarise the current conditions of cultural heritages like shrines or temples damaged by the Great East Japan Earthquake in Minami-sanriku-cho, Miyagi prefecture, Japan, in order to diagnose problems in efforts to recover such damaged heritages. We firstly used a GIS (geographic information system) to identify shrines and temples within the Tsunami inundation areas, and then conducted a field survey to investigate the damages and current recovery processes of them. At the result, we found that severe damages of the precincts of the shrines or temples and that those caused serious destruction of the cultural environment that used to be attached with the precincts. Although we found less severe damages for the main buildings and graveyards, there remained no local communities in the vicinity of temples or shines damaged in many cases. The local government of Minami-sanriku-cho decided to relocate the residential areas from coastal low grounds to higher grounds to avoid the risk of Tsunami in the future. The major challenge to overcome this situation is to find the way to redevelop the cultural environments lost by the disaster.

Keywords : Great East Japan Disaster, Post Disaster Recovery, Culural Heritage, GIS,

1. 研究の背景と目的

激甚な被害をもたらした東日本大震災後、諸学会や行政等が被災状況の把握、震災復興に向けて、様々な取り組みを進めている。東日本大震災に際しては、立命館大学歴史都市防災研究所（歴史都市防災研究センター当時）が、被災文化財の地理的分布に着目し、これを把握する基盤的な地理情報の整備、ならびにGIS（地理情報システム）環境を利用した被災文化財の地理的特徴の把握に、文化庁の協力を得ながらいち早く取り組んだ。東日本大震災のように、国土の広範囲に激甚な災害が生じた際、被災の可能性のある文化財の地理情報を、それを必要とする人々に素早く提供する仕組みが必要であることを予測しての取り組みであった。

この研究を通して、国指定文化財等の被災だけでなく、地域とともにある登録文化財等に多くの被害報告があがっていることがわかった¹⁾。その後、日本建築学会等で進められた現地調査により、指定文化財よりも登録文化財やいわゆる未指定文化財に甚大な被害が発生していることが明らかになっていった²⁾。これらは、人々の生活や歴史に密着した地域の文化遺産である。現在、被災から約3年が経過し、東日本大震災の被災地では遅々として進まない復興の過程にあえいでいる。被災地では、時として崩れそうになるコミ

ユニティを、地域の生活と密着した社寺など文化遺産が支えているのではないかと筆者らは考えている。

本研究は、地域の文化遺産が被災後の復興に果たす役割に関する研究の手始めとして、宮城県南三陸町を事例に、被災した社寺等文化遺産の現状を確認し復興の課題について知見を得ようとするものである。

2. 東日本大震災および津波による被害

(1) 被害の概要

2011年3月11日午後2時46分、三陸沖（北緯38.1度、東経142.9度）を震央とする、震源の深さ24km、地震の規模モーメントマグニチュード9.0の平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震が発生した。強い揺れのあと、同日午後2時49分に、岩手県、宮城県、福島県に大津波警報が発表された。津波は沿岸部に達し、内陸部を襲った。その後、発生した余震は、最大震度6強が2回（2011年3月11日茨城県沖、2011年4月7日宮城県沖）、最大震度6弱が2回（2011年4月11日福島県浜通り、2011年4月12日福島県中通り）、最大震度5弱が45回、最大震度4が236回におよんだ（2013年9月1日現在、消防庁災害対策本部）。この災害による甚大な被害は、総務省消防庁³⁾ および文部科学省⁴⁾ によって、以下のようにまとめられている。

- ・ 人的被害：死者 18,703 人、行方不明者 2,674 人、負傷者 6,220 人
- ・ 住宅被害：全壊 126,574 棟、半壊 272,302 棟、一部破損 759,831 棟、床上浸水 3,352 棟、床下浸水 10,217 棟
- ・ 非住宅被害：公共建築物 14,085 棟、その他 82,532 棟
- ・ 文化財等の被害：744 件、うち国宝 5 件、重要文化財 160 件。指定文化財の被害には、2011 年に登録された世界遺産「平泉一仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」の登録資産である毛越寺庭園が含まれている。毛越寺では、庭園に配置してある立石が傾斜した。

(2) 宮城県本吉郡南三陸町の被害

南三陸町は、東北地方の中心都市仙台の北東 100 キロメートルに位置している。沿岸は美しいリアス式海岸と小島より成り、国定公園に指定されている。基盤となる産業は漁業で、養殖が盛んである。震災前の人口は 17,431 人、5,295 世帯（平成 22 年国勢調査）であった。

2011 年 3 月 11 日、南三陸町は最大震度 6 弱（南三陸町志津川、歌津）の揺れを記録した。その後、南三陸町を含む区域に大津波警報が発表された。2011 年 3 月 11 日午後 2 時 49 分大津波警報（予想される津波の高さ 6 メートル）、同午後 3 時 14 分大津波警報（予想される津波の高さ 10 メートル以上）、3 月 12 日午後 8 時 20 分津波警報、3 月 13 日午前 7 時 30 分津波注意報、3 月 13 日午後 5 時 58 分津波注意報解除の経過であった。歴史的にみると、三陸地方は、約 50 年毎に大きな津波に襲われている。近年では、明治三陸地震(1896)、昭和三陸地震(1933)、チリ地震(1960)での津波がある。これら過去の災害の経験から、南三陸町では、毎年防災訓練を実施するなど災害に強いまちづくりを進めてきたが、想定を上回る規模の東日本大震災にあっては、甚大な被害を被った。南三陸町が公表している主な被害は以下の通りである⁵⁾。

- ・ 人的被害：
 - 死者 619 人（直接死 599 人〔うち町民 547 人、町外 48 人、不明 4 人〕、間接死 20 人）
 - 行方不明者 217 人（うち町民 216 人）
- ・ 住宅被害：
 - 全壊 3,143 戸（2011 年 2 月末日現在の住民基本台帳世帯数の 58.62%）
 - 半壊・大規模半壊 178 戸（同 3.32%）
- ・ 主要公共施設の被害：
 - 【戸倉地区内】戸倉保育所、戸倉小学校、戸倉公民館、自然環境活用センター、波伝谷地区漁業集落排水処理施設、
 - 【志津川地区内】役場（行政第 1 庁舎、行政第 2 庁舎および防災対策庁舎）、志津川保健センター、ボランティアセンター、デイサービスセンター、上下水道事業所、荒砥保育所、志津川公民館、図書館、海浜高度利用施設（海浜センター）、公立志津川病院、地方卸売市場、街なか交流館、袖浜地区漁業集落排水処理施設、本浜公園、松原公園、上の山緑地、せせらぎ公園
 - 【歌津地区内】歌津総合支所、歌津保健センター、名足小学校、水産振興センター（魚竜館）

公表されている東日本大震災による被害の状況については、上記に加え、ライフライン（水道・電気）、最大避難人員、町指定避難所などの被害、また、仮設住宅の建設状況、その他（対策本部について）設置や対策本部会議の開催経過などが示されている。しかし、文化遺産に関する記述は見当たらない。

3. 南三陸町の社寺等文化遺産の被災マップの作成

研究対象地域の社寺を対象として被災の状況を現地調査するために、事前に GIS を利用して津波による被災が発生したと想定される社寺の抽出をはかった。まずは、東日本大震災直前の社寺の分布を把握するために、株式会社ゼンリンによる住宅地図の地理情報データベースである「Zmap TOWN II 宮城県南三陸町 2010」（2011 年 3 月発行）を用いて、2010 年時点で存在していたと判断される社寺建築物を特定した。また、社寺の名称については、宮城県神社庁の神社一覧⁶⁾ および南三陸町の運営する「南三陸町 VIRTUAL MUSEUM」⁷⁾ に含まれる社寺の情報を適宜参考とし、現地調査可能と考えられる社寺の地理情報を作成した。ここでは、Zmap TOWN II に含まれる施設記号によって何らかの社寺に関係した建築物の存在が推定されたものの名称記載がないもの、あるいは名称を他の情報源から特定しえなかったものは対象から除き、結果として 55 件の社寺を特定した。

これらの社寺の津波被災の有無を推定するために、2010 年における社寺の位置が、東日本大震災による津波による浸水範囲内にあるか否かを GIS の空間検索機能によって判定した。津波による浸水範囲の地理情報については、国土交通省都市局の「東日本大震災津波被災市街地復興支援調査」の成果をアーカイブ化した「復興支援調査アーカイブ」⁸⁾（東京大学空間情報科学研究センター）から南三陸町の「津波浸水区域」データを利用した。ただし、当該データは、津波の到達範囲を空中写真判読や現地調査を経て作成された信頼性の高いものではあるが、小さな島嶼部については、作成の対象とされていない点に注意する必要がある。

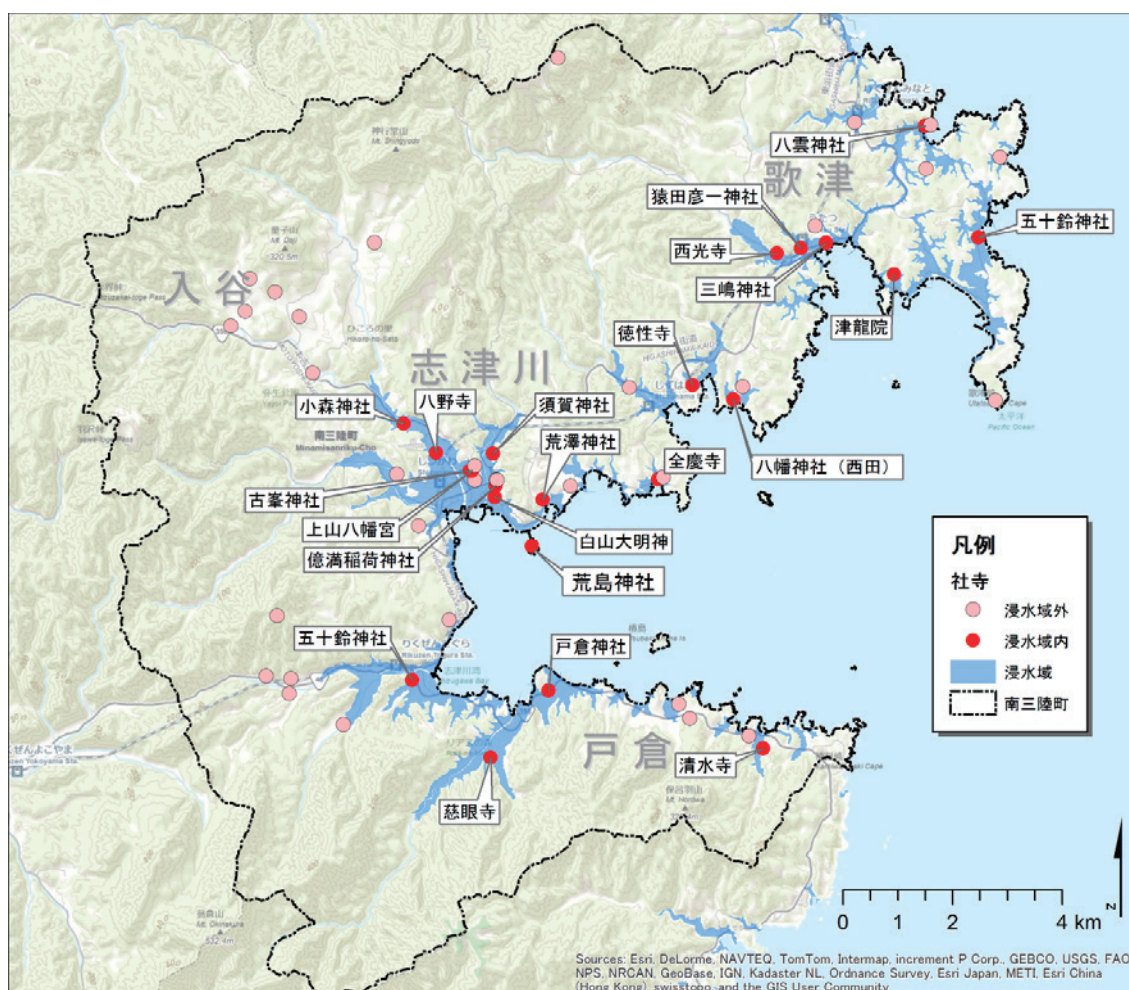


図 1. 南三陸町の津波浸水区域に立地する社寺

図1にみるように、津波による浸水区域は、南三陸町沿岸部の低地の大部分を含んでおり、その総面積は、島嶼部を除いてもおよそ 11km² におよぶ。この津波浸水区域の地理的特徴をみると、津波は河川沿いの谷地形に沿って内陸部へ遡上し、志津川地区では、最大で海岸からおよそ 3km 内陸の地点にまで到達している。また 10m 間隔の DEM（デジタル標高モデル）を利用して津波浸水区域内の標高を調べると、津波が到達した最大標高は 48m であった。これらを参考とすると、志津川湾に浮かぶ荒島に存在した荒島神社は、浸水区域データの内部にその所在地が含まれないものの、実際には津波による被害を受けたことが想定された。そこで、「津波浸水区域」の領域内にあった 21 の社寺に荒島神社を加えた計 22 の社寺を、津波による直接的な被害を被った可能性の高い対象と推定した。図1には、この 22 の社寺それぞれの位置と名称が示されている。南三陸町の社寺の 40% (22/55) が津波によって被災したと想定されるが、海岸から 3km 以上内陸にある入谷地区を除いても、津波による被災社寺の割合はおよそ 46% である。沿岸部付近にあっても、標高の比較的高い場所に社寺が位置する場合もあり、これによって津波による直接的な被災を免れた社寺が、震災発生後の避難場所として重要な役割を果たしたことが想像される。なお、現地調査のために、被災後の「Zmap TOWNⅡ宮城県南三陸町 2012」（2012 年 10 月発行）と比較し、被災後の移転の有無についても確認した。

4. GIS で被災を予測した社寺等文化遺産の現地調査

東日本大震災から約 3 年が経過した現在、南三陸町では、被災の爪跡がいまだに残る一方、道路等のインフラ整備、盛土による嵩上げ工事が進んでいる。本研究では、前章で抽出した南三陸町の津波の浸水域にあり被災が予測される社寺を対象に、2013 年 8 月、および、2014 年 4 月に現地調査を行った。調査は、2013 年 8 月調査については、板谷、ジグヤス、2014 年 4 月調査については板谷が担当した。調査対象は前章で抽出した 22 件の社寺のうち所在が確認できなかった志津川地区の白山大明神、八野寺、歌津地区の西光寺を除く 19 件である。このうち、神社は 14 件、寺院は 5 件で、神社が 4 分の 3 を占めている。

(1) 本殿・本堂

・ 被害の少ない本殿および本堂

調査した 19 件のうち、神社の本殿 9 件（被災神社の 64%）、寺院の本堂 1 件（被災寺院の 20%）に顕著な被害がみられなかった（図2）。津波浸水域にある社寺の本殿および本堂の半数には大きな被害がなかったことになる。境内地の被害は大きい、とくに神社の本殿は高い位置にあり、被害を免れている。以前、東日本大震災被災地全域を対象とした指定文化財の被害に関する調査において明らかにしたように¹⁾、地域にとって貴重な文化遺産は、もともと安全なところに所在していることがわかる。



古峯神社（志津川・上の山）



上山八幡宮（志津川・上の山）

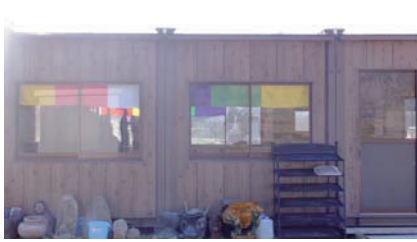


清水寺（戸倉・長清水）

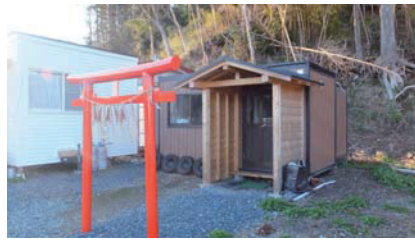
図2. 被害の少ない本殿および本堂

・ 失われた本殿・本堂の仮設復旧

調査した 19 件のうち、5 件（26%）の本殿および本堂は、大きく被災していた。このうち、慈眼寺（戸倉・在郷）ではプレハブの仮堂が建てられている。慈眼寺は、戸倉地域の葬義を司る寺院であり⁹⁾、プレハブの本殿の中には、本尊が祀られている。猿田彦一神社（歌津・伊里前）は、伊里前福幸商店街（2011 年に南三陸町歌津地区にオープンした仮設商店街）に隣接している。現地にはプレハブ小屋が建てられ神を祀り、正面には拝殿が加えられ、鳥居が立てられている。小森神社（志津川・小森）は、公益財団法人東日本鉄道文化財団によって、本殿および鳥居が奉納されている（図3）。



慈眼寺 (戸倉・在郷)



猿田彦一神社 (歌津・伊里前)



小森神社 (志津川・小森)

図 3. 本殿・本堂の仮設復旧

(2) 境内

・ 鳥居や石造物の流失

神社では、戸倉神社 (戸倉・波伝谷)、億満稻荷神社 (志津川・大森)、荒島神社 (志津川・大森)、須賀神社 (志津川・天王山)、五十鈴神社 (歌津・中山) の 5 件に鳥居などの倒壊があった。また、寺院では慈眼寺 (戸倉・在郷) に石造物の倒壊がみられた。特に、半島にあつて両側から津波が押寄せた戸倉神社、島嶼部にある荒島神社では、引きちぎられるように倒壊した鳥居の基礎部分が残し、津波のすさまじさを示している。平坦部に立地する慈眼寺 (戸倉・在郷) では、小型の石造物や、高台の斜面地に並ぶ墓石等を除き、すべてが倒壊している。(図 4)



戸倉神社 (戸倉・波伝谷)



荒島神社 (志津川・大森)



慈眼寺 (戸倉・在郷)

図 4. 鳥居や石造物の被害

・ 被害の少ない境内墓地

慈眼寺 (戸倉・在郷) の境内は、本堂も流失し激甚な被害を受けている。しかし、境内墓地は高台の斜面にあり、ほとんど被害を受けていない。また、清水寺 (戸倉・長清水) においても、境内入口付近の社務所は倒壊しプレハブとなっているが、境内墓地は高台にあり無事である。海岸線近くに立地する全慶寺 (志津川・荒砥) も、本堂軒裏に破損がみられるが、境内墓地の立地は他と同様高台にあり無事である (図 5)。



慈眼寺 (戸倉・在郷)



清水寺 (戸倉・長清水)



全慶寺 (志津川・荒砥)

図 5. 被害の少ない寺の墓地

・ 未だ復旧の遅れる参道

荒島神社 (志津川・大森)、億満稻荷神社 (志津川・大森)、五十鈴神社 (歌津・中山)、八雲神社 (歌津・田ノ浦) の 4 件 (被災神社の 29%) では、倒木などは片付けられているが、階段や路面など、参道の復旧が遅れている (図 6)。荒島に所在する荒島神社では、荒島が個人所有であり、所有者の許可なく復旧作業に着手することができず、いまだに侵入が制限されている¹⁰⁾。

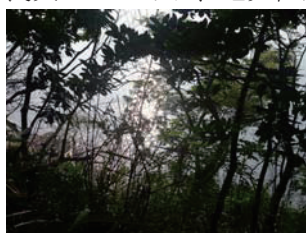
・ 境内の樹木の枯死

境内の樹林についてみると、17 件 (89%) の被災社寺に被害の痕跡がみられる。境内に限らず、特にスギは海水を被ったことによる塩害で枯死が進んだ。これら枯死した樹木の伐採が進み、社寺においては、境内の聖なる雰囲気は損なわれる事例が多い (図 7)。

・ 復興事業に伴う環境の変化

南三陸町では、災害復旧工事が進んでいる (図 8)。都市計画道路事業が進む国道 398 号 (本吉街道) に

沿う小森神社（志津川・小森）では、新たに整備された境内および本殿が剥き出しになっている。また、八幡神社（志津川・葦の浜）では、隣接して土地整備が進捗し現状では近づくことができない。激甚な被害を受けて本堂を失った慈眼寺（戸倉・在郷）では、土地整備による土盛りが隣接地まで行われており、敷地の土地形質の変容が行われようとしている。これらでは、復旧工事の進捗に伴い、社寺境内の持つ宗教的雰囲気喪失しつつあり、地元住民とともにあった環境をいかにして回復することができるかが課題となろう。



荒島神社（志津川・大森）



五十鈴神社（歌津・中山）



八雲神社（歌津・田ノ浦）

図 6. 参道の被害



慈眼寺（戸倉・在郷）



億満稻荷神社（志津川・大森）



五十鈴神社（歌津・中山）

図 7. 境内の樹林の伐採



小森神社（志津川・小森）



八幡神社（志津川・葦の浜）



慈眼寺（戸倉・在郷）

図 8. 復興工事による環境の変化

(3) 津波碑

・ 新たに建立された津波碑

東日本大震災の後、新たに建立された津波碑がある（図 9）。古峯神社および上山八幡宮（志津川・上の山）は、多くの自治体職員が被災した南三陸町防災対策庁舎の東の高台にある。津波は、本殿の下まで到達し、宮司家を流し去った。これを教訓とするため「波来の地」の碑を宮城大学が寄贈し建立している。五十鈴神社（戸倉・折立）では、未来の人々へ「地震があったら、この地よりも高いところへ逃げる」とした東日本大震災記念碑が、折立契約講によって 2012 年に建立されている。内容は「2011 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分、東日本大震災発生、マグニチュード 9.0 の超巨大地震により、約 40 分後、予想を遥かに超える巨大大津波が押し寄せ、最高水位が本記念碑まで到達した。ここ五十鈴神社に戸倉保育所の園児 18 人、戸倉小学校の児童 91 人の他教職員、地区住民等 190 人余りが避難し一夜を明かして難を逃れた。太平館高台、古館高台に避難した地区住民は安全であったが、戸倉中学校や五十鈴神社下の宇津野高台他に避難した住民に多数の死者・行方不明者が出た。」と、具体的に記されている。



古峯神社・上山八幡宮（志津川・上の山）



五十鈴神社（戸倉・折立）

図 9 新たに建立された津波碑

5. 復興計画における文化の継承

(1) 南三陸町が示す志津川都市計画区域内の復興計画

南三陸町では、南三陸町震災復興計画策定会議、南三陸町震災復興町民会議、地域懇談会の議論を経て、2011年9月、南三陸町震災復興計画（素案）を策定している。復興計画（素案）では、まちの将来像を「自然・ひと・なりわいが紡ぐ安らぎと賑わいのあるまち」とし、復興の目標を、1. 安心して暮らし続けられるまちづくり、2. 自然と共生するまちづくり、3. なりわいと賑わいのまちづくり、目標年次を2021年としている。南三陸町は高台移転を選択し、文化遺産については、目標2. 自然と共生するまちづくり、(4)ふるさとを想い復興を支える人づくり、の中で位置づけている。すなわち、①伝統文化の継承、②地域資源を活かした教育の充実、③教育関連施設等の復旧整備、④地域コミュニティ活動の推進、などである。

2013年2月時点で公表されている復興計画イメージ図を図10に示し、計画内容を記す。図10の青色で示されたエリアは、浸水区域に含まれない高台のエリアである。ここは、「津波復興拠点整備事業」を用いて優先的に整備する、高台移転住宅地等の用地としている。橙色で示された「被災市街地復興土地区画整理事業」の区域は、地震と津波によって被災したもともと市街地であったエリアである。ここは、居住を制限して商業観光ゾーン、水産加工業などを中心とした産業ゾーンなどを整備するエリアとしている。緑色の「震災復興記念公園」のエリアは、防災機能を具備し南三陸町の鎮魂復興の象徴として防災文化を育むメモリアル公園を整備する公園・緑地ゾーンとしている¹²⁾。このエリアの東端には防災対策庁舎が2014年4月時点で震災遺構の様相を呈しており、多くの人々が手を合わせている。

志津川地区のもともとの市街地（橙色および緑色のエリア）の主な氏神社は上山八幡宮である。しかし、上山八幡宮と高台移転住宅地等の用地（青色のエリア）は、谷を挟み分断されている。



図10. 南三陸町志津川都市計画区域内の復興計画イメージ図（H25.2時点）
「志津川都市計画区域内での復興計画」（南三陸町）¹²⁾ に基づいて作成

(2) まちづくり協議会の議論にみる文化の継承

この復興計画を推進する体制として、まちづくり協議会が設置され、志津川地区においては、2012年10月に志津川地区まちづくり協議会専門部会が開催された。まちづくり協議会は、復興計画の具体化に向けて行政と連携し、これを南三陸応援団である、大学・研究機関、企業、団体、NPO・NGO、ボランティア、国・県・市町村などが支援する構図である。専門部会には、高台移転部会、産業再生部会、公園部会の3つの部会がある。高台移転部会は図10に示す青色のエリアについて、産業再生部会は黄色のエリアについて、公園部会は緑色のエリアについて、それぞれ協議している。

まちづくり協議会の各専門部会の公開資料¹¹⁾によれば、当初は文化の継承の重要性が語られていた。し

かし、文化の継承について具体的に議論が進むことはなく、配置すべき商店の業種など、利便性の議論が中心となっていた。計画案の中で文化の継承の具体的な提案が残されているのは、震災復興祈念公園の部分のみであるが、この部分についても、維持管理費確保の課題から、整備規模の縮小が検討されている。新たに形成するコミュニティの中で、これまで培ってきた文化を、どのように継承していくのかに関する議論はまだ見ることができない。

6. 被災した文化遺産の現状と復興の課題

本研究では、GIS（地理情報システム）を用いて、津波による浸水域と重ね合わせ、被災が予測される社寺等文化遺産を抽出し、これらの社寺を対象に現地調査を行った。南三陸町における被災した社寺の現状と復興の課題を以下にまとめる。

津波浸水域では、社寺の境内等に激甚な被害がみられた。しかし、被災した神社の約6割の本殿に顕著な被害が見られなかった。また、寺院では境内墓地が高台にあり大きな被害が見られなかった。これは、本堂が滅失しプレハブの仮本堂としている寺院においても、境内墓地は被害を免れている。南三陸町の津波浸水域では、神社の本殿（神さま）、寺院の境内墓地（ご先祖さま）は、安全な高台に立地している。

約3年が経過し、災害復旧工事が進んでいる。沈下した多くの地盤では土盛りが行われている。寺社があったはずの場所が、整地され失われているものがある。山裾では塩枯れした樹林が撤去されており、境内樹林も同様である。周辺の整備とともに剥き出しになった神社がある。これらでは、神社が持っていた地域の歴史文化を象徴する聖なる雰囲気が損なわれている。

約3年が経過したが、社寺を支えてきた地域コミュニティが回復していない。復興計画は徐々に具体化しつつあるが、高台移転を選択し、新たな居住地をゼロから再建する南三陸町において、地域が育んだ有形無形の文化を、今後とも地域社会とともに存立させる方策については不明である。

祭礼など、社寺で催行されてきた地域行事の存続状況、地域の人々の意向については、本研究における今後の課題である。

謝辞： 本研究は、JSPS科研費25420659（基盤研究C「地域の文化遺産が被災後の復興に果たす役割に関する研究」）の助成を受けたものです。本稿GIS図作成にあたっては、立命館大学文学研究科博士前期課程濱嶋優大氏の協力を得ました。記して謝意を表します。

参考文献

- 1) 中谷友樹・瀬戸寿一・長尾論・矢野桂司・板谷直子（牛谷直子）：東日本大震災による文化遺産の被災状況について 文化財被災地理情報データベースの利用，歴史都市防災論文集，Vol. 5, pp.201-208, 2011
- 2) 日本建築学会：2011年東北地方太平洋沖地震災害調査速報，歴史的建造物の被害，pp.553-572, 2011
- 3) 総務省消防庁：2011年東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）について（第148報），2013年9月
<http://www.fdma.go.jp/bn/higaihou/pdf/jishin/148.pdf>
- 4) 文部科学省：東日本大震災による被害情報について（第208報），2012年9月
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/detail/_icsFiles/afieldfile/2012/10/30/135089_091410_1.pdf
- 5) 南三陸町危機管理課：東日本大震災による被害の状況について，2014年3月
<http://www.town.minamisanriku.miyagi.jp/index.cfm/17,181,21,1,html>
- 6) 宮城県神社庁 神社一覧検索 <http://miyagi-jinja.or.jp/jinja-search/top.php>
- 7) 南三陸町VIRTUAL MUSEUM <http://www.town.minamisanriku.miyagi.jp/museum/>
- 8) 復興支援調査アーカイブ <http://fukkou.csis.u-tokyo.ac.jp/default/about>
- 9) 東北歴史博物館：葬制、波伝谷の民俗－宮城県南三陸沿岸の村落における暮らしの諸相－，pp.101-106, 2008年3月
- 10) 東北大学東北アジア研究センター：W-0 南三陸町志津川地区，東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査2012年度報告集，pp.305-307, 2013年3月
- 11) 南三陸町復興事業推進課：まちづくり協議会について，<http://www.town.minamisanriku.miyagi.jp/index.cfm/6,237,68,html>
- 12) 南三陸町復興市街地整備課：志津川都市計画区域内での復興計画，
<http://www.town.minamisanriku.miyagi.jp/index.cfm/6,0,22,304,html>